

# 弥生時代の再葬制

春成秀爾

- 一 再葬過程の復元
- 二 再葬墓地をのこした集団
- 三 再葬制の系譜
- 四 再葬制の意義

## 論文要旨

東日本の弥生時代前半期には、人の遺体をなんらかの方法で骨化したあと、その一部を壺に納めて埋める再葬制が普遍的に存在した。再葬関係と考えられている諸遺跡の様相は、変化に富んでいる。それは、再葬の諸過程が別々の場所に遺跡となつてのこされているからである。

再葬は、土葬—発掘—選骨—壺棺に納骨し墓地に埋める—のこつた骨を焼く、または、土葬を省略してただちに遺骸の解体—選骨……の過程をたどることもあつたようである。遺体はまず骨と肉に分離し、ついで骨を割つたり焼いたりして細かく破碎している。骨を本来の形をとどめないまでに徹底的に破壊することは、彷徨する死靈や惡靈がとりついて復活することを防ごうとする意図の表れであろう。すなわち、この時期には死靈などを異常に恐れる風潮が存在したのである。

この時期にはまた、人の歯や指骨を素材にした装身具が流行した。これは、

死者を解体・選骨する時に、それらを抜き取つて穿孔したものであるが、一部の人に限られるようである。亡くなつた人が生前に占めていた身分や位置などを継承したことを示すシンボルとして、遺族の一部が身につけるのであろう。

再葬墓地の分析によれば、十基前後を一単位とする小群がいくつも集まって一つの墓地を形成している。そのあり方は縄文時代の墓地と共通する。したがつて、小群の単位は、代々の世帯であると推定する。

再葬墓は、縄文時代晩期の信越地方の火葬を伴う再葬を先駆として、弥生時代前半期に発達したのち、弥生中期中ごろに終り、あとは方形墳丘墓にとつてかわられる。しかし、再葬例は関東地方では六世紀の古墳でも知られているので、弥生時代後半期には人骨を遺存した墓が稀であるために、その確認が遅れているだけである可能性も考えられる。